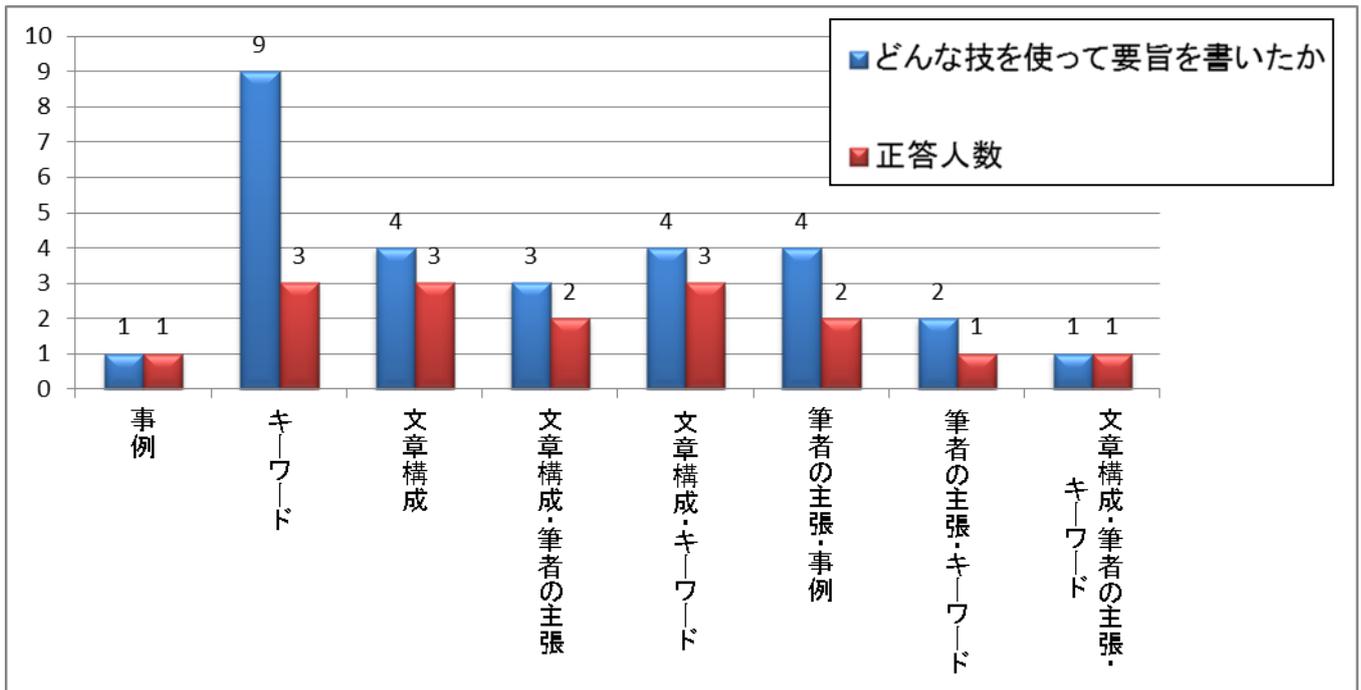




【評価テストの解答類型】を見ると、準正答を含めた正答率は67.8%であり多くの児童が要旨をまとめることができていました。誤答を見ると、字数の条件は満たしているものの、筆者の主張のみや事例を取り入れて書くことができていない児童が目立ちました。

【要旨を書くときに使った書き技】を見ると、複数の観点（本単元でいう書き技）を多く生かして書いた要旨の正答人数が多いことが分かります。このことから、多くの観点から要旨を書こうとすることで、文章に書かれた内容の中心を捉える要旨に近付くことが分かりました。

本単元においてプレゼンテーションを言語活動として位置付け、それに生かすために要旨を捉えていくという学習過程は、児童の主体的な学習につながったと考えます。また、教材文を輪切りにして学習を進めていくのではなく、要旨をまとめるという目的を明確にして、そのために必要な力を付ける活動を計画的に位置付けていくことが大切だと分かりました。



【要旨を書くときに使った書き技】

## (2) 成果と課題

実践校においては、学習状況調査等の結果から、以下のように課題を焦点化し、具体的な手立てを考え、授業実践に取り組みました。

### ○実践校における課題の焦点化

「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨を捉えること」



### ○課題の解決に向けて必要な力

「文章の内容を的確に押さえて要旨を捉える力」



## ○授業改善のポイントを生かした手立て

**ア 児童に見通しをもたせ、主体的な学びをつくること**

〔手立て①〕 既習の説明的文章を副教材として用いて、学び方を確認させる。

〔手立て②〕 文章の内容を的確に押さえるために「読みのものさし」を使って読み取り、プレゼンテーションをつくる技と関連させる。

**イ 単元を通して言語活動を位置付けて授業を行っていくこと**

〔手立て③〕 単元を通じた言語活動として「プレゼンテーション」を位置付け、主体的な学習を促す。

**ウ 自分の考えを広げたり深めたりさせる話し合いを授業に取り入れること**

〔手立て④〕 児童が考えを広めたり深めたりする場として、グループ学びや全体学び（なるほどタイム）を設定する。

**エ 学びを自覚させる振り返りを取り入れること**

〔手立て⑤〕 振り返りで、「学習して分かったこと」をまとめさせ、自分の学びを自覚させる。

## 【成果】

〔手立て①〕 単元の導入で、既習の説明的文章を副教材として用いて、要旨の捉え方と読み取ったことをプレゼンテーションへ生かす作り方を確認させたことは効果的でした。その確認が、本教材の比較の対象となり、児童は説明的文章を比較しながら、学習を進めることができました。「プレゼンテーション作り」の共有化を図ることができ、プレゼンテーションの作り方を知ることができました。

〔手立て②〕 「読みのものさし」を使って読み取っていくことで、児童は説明的文章の学び方を習得させることができました。また、文章構成図から序論と結論、本論の事例と意見の関係、キーワード、題名などから筆者の主張や内容の中心を捉えることができました。

〔手立て④〕 単元を通して、ひとり学びとグループ学び、全体学びの場を意図的に取り入れたことで、いろいろな考え方に触れ自分の考えを広げたり深めたりすることができました。特にグループ学びでは、話し合いながらより良いものを作っていく協働した学びができ課題の解決に向けて学び合う力が高まったと思います。

〔手立て⑤〕 「要旨を捉える技」「プレゼンテーション作成の技」など「習得したこと」「生かしたいこと」の視点で振り返りをさせたことで、自分ができるようになったことを具体的に自覚できるようになり、自分の力をメタ認知するようになりました。また、ひとり学びの自己評価、グループ学びや全体学びでの相互評価を行うことで身に付いた力と自信が次の学習に生かされるようになったと感じます。

## 【課題】

〔手立て③〕 「要旨を捉えそれについての自分の考えを、事例や筆者の主張と関連付けて、鹿島の未来をえがいたプレゼンテーションをしよう」という学習課題を設定しました。単元を通じた学習課題で児童は意欲的に学習を進めることができました。しかし、単元で付ける力を「要旨を捉えること」と「自分の考えをもつ」という2つの力をプレゼンテーション作りに生かすことは難しかったです。要旨を捉える力を身に付けさせるためには、

他の言語活動を仕組んだ方が児童の意欲も持続すると考えられます。単元で身に付けさせたい力とその力を高めることができる言語活動を仕組む必要があります。